

ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER STADTMUSIKANTEN

グリム兄弟 Bruder Grimm

青空文庫

主人もちのろばがありました。もうなが年、こんきよく、おもたい袋をせなかにのせて、粉ひき所じよへかよつていました。さて、年をとつて、だんだんからだがいうことをきかなくなり、さすがにこのうえ追いつかうのがむりだとわかると、主人は、こちらでろばのかいぶちをやめたものか、と考えだしました。ところで、ろばは、さつそくに、こりや、ろくなことではないとさとつて、逃にげだして、ブレーメンの町をめぐあてに、とことこ出かけました。そこへ行つたら、町の楽隊がくたいにやとつてもらえようという胸算用むなざんようでした。

しばらくあるくうちに、往來おうらいに一ぴき、りよう犬が、だるそうにころがつて、口ばかりあけて、はつは、はつは、あえいでいるのに出あいました。それはさんざん野山をかけるいて、へとへとになつていふというようすでした。

「おい、すたこら大將、なにをあつぷ、あつぷいつている。」と、ろばは声をかけました。「いやはや、きいてくれ、こういうわけだ。」と、犬はいました。「なにしろ年はとる、いくじがなくなる、おいらもむかしのげんきで獵場りようばをかけあるくわけにはいかない。主人は、それならいっそ、たたき殺してしまえということになった。あわてて逃げだしたというわけだが、さて、この先どうしてパンにありつくか、じつはかんがえているところだ

よ。」

「ところで話だが、おいら、これからブレーメンの町へ出かけて、町の楽隊にやとつてもらおうとおもうんだ、どうだ、おめえ、いつしよに行つて、いちばん、音楽でめしをくう気はないか。おいらリユウトをひくから、おめえ、カンカラ太鼓だいこをたたくがいい。」

りよう犬は、うん、よかろうというので、いつしよに出かけました。

それからあまり行かないうちに、ねこが一ぴき、往来にすわりこんだまま、それこそ三日も雨をくつたような顔をしていました。

「やあ、どうしたい、床屋とこやの親方、どうやらおひげの手入どころではないという顔つきだが。」と、ろばはいいました。

「いのちとかえがけというところだ。けいきのいい顔をしてもらえまい。なにしろ年をとつて来てね、齒はぼくぼくになる、ねずみのやつをおいまわすよりか、ろばたで香箱こばこつくつて、ごろにゃん、ごろにゃん、のどをならしていたくなるさ。そこで、主人のかみさんが、いつそ水にはめておしまいよといひだした。そうされないうちに、とびだしては来たが、さていい思案しあんはないしき、いったいどこへどう行つたものかと、あぐねているのだよ。」と、ねこはいいました。

「おれたちとなかまで、ブレーメンの町へ行けよ。おまえさんは、夜の音楽ならお手のものだろう、町の楽隊につかってもらえるぜ。」と、ろばはいいました。

ねこは、さつそくさんせいして、いつしよに出かけました。

やがて、三人組の脱走者^{だつそうしや}は、とある屋敷内^{やしき}に來かかりました。門の上に、その家のおんどりがのつていて、ありつたけの声をふりしぼつて、さげび立てていました。

「おい、骨のしんまで、じいんとくるような声を出すなあ。どうかしたのかい。」
と、ろばはいいました。

「なあに、あしたはいいお天気ですよつて、知らせてやっているところだよ。」と、おんどりはいいました。

「なにしろ、けつこうなお聖母^{せいぼ}さまの日だ、おちいさいキリストさまの下着の、おせんたくして、ほしなすつた日だ。ところが、そのあしたの日曜日^{にちようび}に、お客があるというんで、ここのおかみさんが、なさけ知らずにもほどがあらあ、女中の話だがね、それで、あすはおいらをスープにしてたべつちまうつてんでね、こん晩、さつそく、首をチョン切れといいつかつたよ。だから、せめて声のだせるうちとおもつて、おいら、のどのやぶれるほどわめき立てているんだよ。」

「やれやれ、なんとということだい、赤ずきん、おれたちといっしょに行くがいいよ。ブレーメンの町へ出かけるところだ。ころされて死ぬくらいなら、すこしは気のきいた所が、どこへ行つたつてあろうじやないか。おめえはいい声しているから、なかまになつて音楽をながしてあるけ、いっばしかせげるぞ。」と、ろばはいいました。

この申し出は、しごくおんどりの気に入りました。そこで、こんどは四人つれだつて出かけることになりました。

二

ところで、ブレーメンまでは、なかなか一日では行けません。そのうち日がくれたので、森の中へはいつて、そこでひとばんあかすことにしました。

まず、ろばと犬とは、一本の木の下にごろりと横になりました。ねことおんどりとは、木の枝の上にやすみました。ところで、おんどりはわざわざこずえの先まで行つてとまりましたが、これが、いちばんの安全な場所であつたのです。さてねようとするまえ、このおんどりはもういちど、東西南北、風のふく方角がどこかとながめまわしたとき、ふと、

むこうに、ちらちら火らしいものがみえたので、なかまに声をかけて、どうしても、そうとおくまいところに家があつて、あかりがついているらしいといつてしらせました。

ろばが、そこで、

「じやおれたち、ここをひきはらつて、もつと先まで行つてみようや。どうもこの宿は上等じょうとうとはいかないから。」と、いいますと、犬もそこへ行つたら、骨の一、二本、こかおりとによると肉の香ぐらいかげようかとおもつて、さつそくさんせいしました。

こういうしで、四人組は、そのあかりのさしている方角ほうかくにむかつて、出かけました。するうち、あかりはずんずんはつきりしてきて、ぱあつとてりだしたとおもうと、そこはどろぼうの家で、中にはこうこうと灯ひがともっていました。

ろばは、なかまでいちばんのせいたかのつぽなので、窓のところまで行つて、中をのぞいてみました。

「親方、なにかあつたかね。」と、おんどりはたずねました。

「どうして、あつたかどころのさわぎじゃないぞ。」と、ろばはこたえました。「ちゃんとテーブルごしらえがしてあつて、けっこうなごちそうと、のみものが、山とならんでいゝるよ。どろぼうども、てんでに、はちきれそうな顔で、よろしくやつてるところさ。」

「そいつをものにしてようじゃないか。」と、おんどりはいました。

「うん、うん、どうしたってわりこまなきやあな。」と、ろばはいました。

そこで、まず、どろぼうどもを追っばらうには、どうすればいいかと、四人組の動物は、そつだん相談をはじめましたが、やがていくふうがみつかりました。

ろばは、前足を窓にのせることになりました。犬は、ろばのせなかにとびあがることにしました。ねこは犬のせなかによじのぼることにしました。おしまいに、おんどりが、ばさばさととびあがって、ねこの頭の上ののつかりました。いよいよしたくができあがると、一、二、三のあいずで、四にん組はいっせいに、音楽をやりだしました。ろばはひひんとわめきました。犬はわんわんほえたてました。ねこはにやおんとなきました。おんどりはこけこつこうと、ときをつくりました。とたんに、まどをつきやぶって、いちじょう一回へやの中へとびこみました、がらん、がらん、がらん、音をたててガラスはこわれました。

どろぼうどもは、びつくりぎようてん、きやあとさげび声をあげるとびあがりました。たいへんな怪物かいぶつがとびこんで来た、そうとよりしか考えません。もうすっかりおびえきつて、てんでに、あたまをかかえて、そとの森の中へ、にげだして行きました。

そこで、四人組は、ゆうゆうテーブルにつきました。ごちそうは、のこりものでも、が

まんすることにして、それでも、これからあと四週間ぐらい断食だんじきしてもいいといういきおいで、つめこめるだけ、たらふくつめこみました。

三

さて、四人組の楽隊なかまは、おなかができる、あかりをけして、めいめいのうまれつきとすきずきにまかせて、いいぐあいの寝床ねどこをさがして休みました。ろばはそのつみごえの上にねました。犬は戸のかげにねました。ねこはへつついの上で、灰のぬくみをさがしてねました。おんどりは、とまり木のかわりに、屋根うらのはりの上にのりました。なにしろ、みんな遠道をして来て、くたびれていましたから、もうさっそくに、ぐっすりねつきました。

真夜中をすぎたときに、どろぼうどもが、とおくからみますと、うちの中にはあかりがともつていず、中はひっそりかんと、しずまりかえっているようでした。

「どうもおれたち、おどかさされて、にげだしたといわれちゃあ、がまんできないぞ。」
おかしらはこういって、ひとり手下てしたにいいつけて、ようすをみせにやりました。

さて、いつかつた手下がはいつてみると、家の中はどこもひっそりしていました。そこであたりをつけてみようとおもつて、台所へ行きました。すると、やみに光っているねこの目だまを炭火すみびとまちがえて、いきなりマッチをつっこみました。ところが、ねこのほうは、おやすいご用とうけてはくれず、ううう、とたけりながら、顔にとびついて、めつたらやたらに引つかきました。

いやはや、おどろいたのなんの、手下のどろぼうは、したたかにやられて、びっくり、はいもう、うらの戸口から逃げだそうとしますと、そこにねていた犬が、とびあがつて、むこうずねにかみつきました。そこで、庭へかけだして、つみごえのそばをかけぬけようとしみますと、ろばがあと足でしたたかに、けとばしました。すると、このさわぎで目をさまさせられためんどりが、はりの上から、はしやぎきつて、ひと声、キケリツキー、とどなりました。

どろぼうは、いのちからがら、足にまかせてにげだして、おかしらの所へかえりました。そうしてこういいました。

「どうもはや、たいへん、あの家には、すごい魔物まものがはいりこんでいて、いきなり、きみわるく、ふうう、と息をふっかけて、ながい指で顔をひっかきました。それから、戸の前

にはひとり、男が待ちぶせていて、小刀をすねにつきたてました。庭へ出ると、なんともえたいの知れない、まっ黒なぼけものが立っていて、こんぼうをふつるて、したたかなぐりつけました。その上、たかい所には、ちゃんと裁判官さいばんかんがひかえていまして、さあ、そのわるもの、ここへつれて来い、とどなりました。いやもう、さんざんのていたらくで、まっくらさんぼう逃げて来ました。」

それからは、どろぼうどもも、こりて、二どとふたたび、この家にはいろうとはしませんでした。ところで、ブレーメンの楽隊なかま四人組も、ひどく、ここが気に入ったので、それなりもうよそへ出て行こうとはしませんでした。

さて、これまで申したことは、ついこないだ、それこそ湯気ゆげの立つほやほやの口からきいたお話ですよ。

青空文庫情報

底本：「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、
底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：浅原庸子

2004年6月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ブレーメンの町楽隊

DIE BREMER STADTMUSIKANTEN

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 グリム兄弟 Bruder Grimm

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>